

京都 だより

Kyoto Dayori

かくやく
【特集】 赫奕たる近代建築

建築家・建築史家 安達英俊

写真撮影／沼田俊之（広報編集委員会）

* 肩書、所属等は掲載当時のものです

- 2016年 7月号 第1回 「京都中央電話局西陣分局」
2017年 1月号 第2回 「聴竹居」
2017年 3月号 第3回 「大和文華館」
2017年 5月号 第4回 「大阪カテドラル聖マリア大聖堂」
2017年 7月号 第5回 「京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館」
2018年 3月号 第6回 「日本工芸館」



KYOTO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS

一般社団法人 京都府建築士会

<https://www.kyotofu-kenchikushikai.jp>

(一社) 京都府建築士会

正面(北側)全景
中央のバイウィンドウが時代の新鮮さを表現する



かくやく
赫奕たる近代建築
1

岩元
禄

京都中央電話局西陣分局

1921
(現・NTT西日本西陣別館)

安達 英俊
建築家・建築史家



側面(東側)全景
ジャイアントオーダーの列柱と軒天を覆う天女レリーフ

村野藤吾(1891~1984)と同世代の建築家が関西(京都)に
どのような作品を残したのか。様式建築とモダニズム建築の葛藤の中で
生まれた都市に刻まれた建築作品の旅に誘う。
再生・保存を経て今尚使用されている建築を、今日の眼で検証してみよう。



屋上階の廻廊詳細



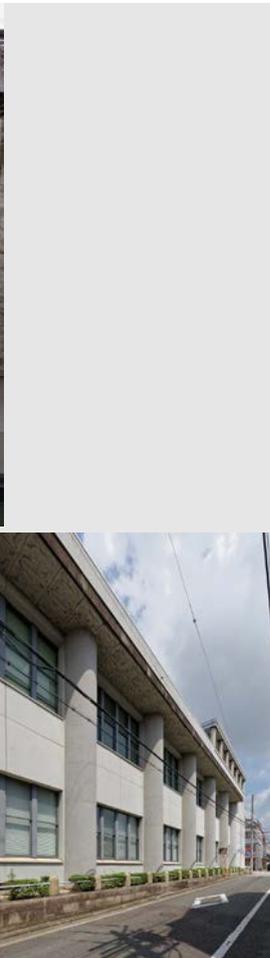
北東からの眺め



正面階段室のライオン像



側面軒裏に設置された天女のレリーフ



側面の全景とコーナー

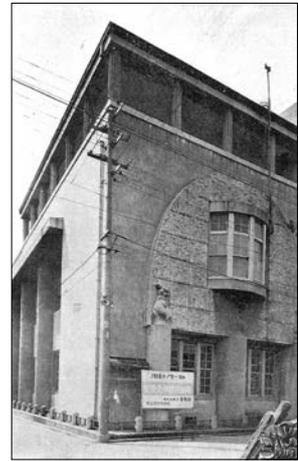
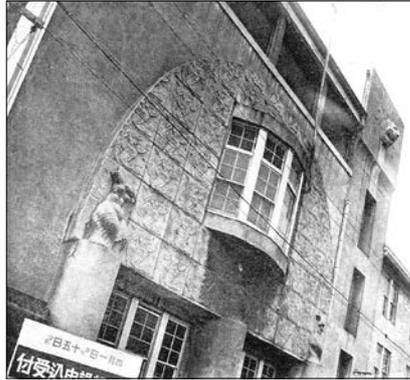


正面
裸婦のトルソの詳細

京都中央電話局西陣分局

位置 京都市上京区油小路通中立
賣下ル甲斐守町
設計 逓信省
施工 安藤組
起工 大正10年1月
竣工 同 11年10月
工費 107,000圓
敷地 1,000坪21(官舎敷地を含む)
建坪 183坪25
延坪 315坪25
階数 2階
構造 鉄筋コンクリート及煉瓦造

<「近代建築画譜」1936より>



京都中央電話局

位置 京都市上京区三條通東洞院
西入梅忠町
設計 逓信省巻締課
施工 大倉土木
起工 昭和4年5月8日
竣工 同 6年1月8日
工費 281,000圓
敷地 163坪14
建坪 682坪20
延坪 55尺57
階数 3階地階及中3階付
構造 鉄筋コンクリート造
備考 以上は第2期工事概要にして第1期は不詳

<「近代建築画譜」1936より>

日本の近代建築

明治の建築近代化は、19世紀中頃生まれの3人が主導で推進する。各部門で実作を残し、次の世代を育成する。概要すると次のように分類できる。

- ・辰野金吾〔日本建築学云〕
(1854~1919)
- 片岡 安 — 安井武雄
- 曾根達蔵 — 中条精一郎
- 野口孫一 — 日高 胖 — 長谷部鋭吉
- 葛西万司

- ・妻木頼黄〔大蔵省〕
(1859~1916)
- 長野宇平治
- 武田五一 — 吉武東理
- 渡邊 節 — 村野藤吾
- ・片山東熊〔宮内省〕
(1853~1917)
- 山口半六

一方に、通信の近代施設に多くの建築家が関与し作品を残す。逓信省の建築系譜は、吉井茂則、三橋四郎、内田四郎、岩元禄、吉田鉄郎、山田守、戦後には小坂秀雄、葉師寺厚、山中侠と様式建築からモダニズム建築に移行する。

この中で、その転換期をになった岩元禄に焦点をあててみよう。

建築の緒元

1920年(大正9) 東京帝国大学建築

科の堀口捨己、山田守、石本喜久治、瀧澤真弓、森田慶一、矢田茂により、卒業設計展覧会で分離派建築会を発会する。

彼らは4年先輩である岩元禄に兄弟し、様式建築を超えてウィーン・ゼッセエシオンの影響や、オランダ、ドイツ表現主義を参照して新しい建築運動を行う。

逓信省の建築技師、岩元禄(1893~1922)は1918年東京帝国大学建築科を卒業、逓信省に入省し29歳の若さで亡くなるまでに三つの建築作品を具現化している。

京都中央電話局西陣分局(1921)、東京中央電話局青山分局(1922)、箱根観光旅館(1922)である。現存するのは、唯一この作品のみである。

電話局の設計監理する逓信省技師は、当時の通信産業が郵便より電話に移行を受けて、日本の各所に建築を設置する。

その後、逓信省を辞職した岩元は1921年1月、東京帝国大学建築科助教授(建築意匠論)として迎えられ教壇にたつが、同年秋に結核を発症して翌年末に死去する。29歳の若さである。

これらの建築家たちは第二世代と呼ばれ、大正初期より様式建築に異論を唱え、表現主義やゼッセエシオンに傾倒し、やがてモダニズム建築へと発展する。

日本の表現主義建築

建築の詳細を見てみよう。鉄筋コンクリート造、一部木造、三階建。

1921年1月より1922年10月にかけて造られ、延床面積315、25坪、金



あだち・ひでとし

安達英俊建築研究所主宰
一級建築士、工学修士
京都工芸繊維大学大学院修了
(修士論文・近代建築の再構築に関する研究―
渡邊節の建築を通して―)
元渡邊節建築事務所所員(1974～1979)
委員/京都工芸繊維大学美術工芸資料館
「村野藤吾の設計研究会」委員(1998～)
建築作品/ギャラリー「アーティスロンク」(1999)
著書/「村野藤吾建築案内」(TOTO出版) 2009 (共著)

●参考文献

「近代建築画譜」1936
「もうひとつの京都」2011
京都工芸繊維大学美術工芸資料館

●写真撮影/沼田俊之

謝辞：西日本電信電話株式会社、
株式会社NTTファシリティーズ
関西事業本部、株式会社NTT
ビジネスアソシエ西日本の
関係者の協力を得ました。
お礼を申し上げます。

大阪中央電信局

位置 大阪市北区堂島濱通2丁目
設計 逓信省
施工 大林組
起工 大正14年3月
竣工 昭和2年9月
工費 1,045,000圓
建坪 850坪
延坪 3,956坪
階数 5階 地階塔屋付
構造 鉄筋コンクリート造

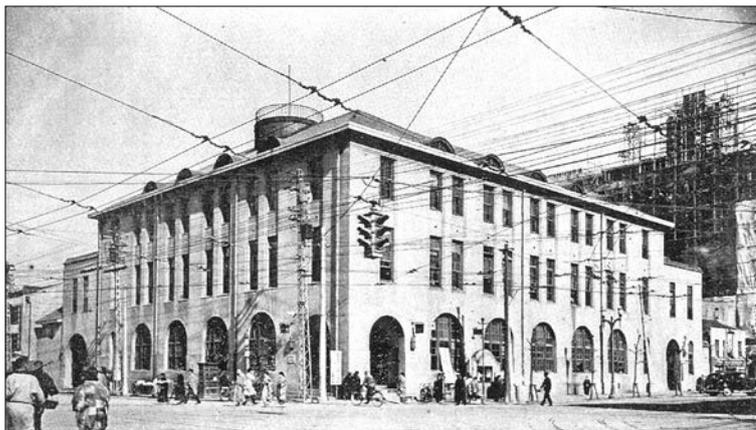
<「近代建築画譜」1936より>



京都七条郵便局

位置 京都市下京区烏丸通七條下
ル東塩小路町721ノ1
設計 逓信省
施工 安藤組
起工 大正10年11月
竣工 同 11年6月
工費 335,000圓
敷地 597坪44
建坪 257坪12
延坪 7,23坪0:6
階数 3階
構造 鉄筋コンクリート及鐵骨煉瓦造

<「近代建築画譜」1936より>



107,000円(当時)で、また同時期
に京都七条郵便局を逓信省技師・吉田鉄郎
(1894～1956)が設計監理してい
る。この建築は現存していない。
正面(北側)ファサードは、三本の円形
附柱(ピラスト)の上に裸婦のトルソー、
背景にアーチ状の天女のレリーフ、中央に
ペイウインドウの開口部が全体を引き締め
る。大正期の京都に出現した時は異彩を放
つ。西陣の若い織手は裸婦に赤ら顔したと
いう。

東立面は5本のジャイアントオーダーと
ギリシャ建築を彷彿させる。軒裏には天女
のレリーフが一面を覆う。
3階は寄棟屋根を持ち、列柱が施された
廻廊が、北、東側に配されている。
上階の意匠は長野宇平治(1867～1
937)の大倉精神文化研究所(1932)
に引き継がれている。
岩元の影響はその後、神戸中央電話局兵
庫分局(1922)、下関郵便局電話事務
室(1923)にみられる。

間接的に岩元が影響を受けた建築家に、
武田五一(1872～1938)がいる。
20世紀初頭にパリで、アール・ヌーボー、
アール・デコ、ゼセツシオンを体験し様々
な資料を持ち帰り、京都高等工芸学校(現・
京都工芸繊維大学)、京都帝国大学におい
て、吉武東理、大倉三郎、東畑健三等を育
てる。

彼の建築作品、求道会館(1915)は
東京帝国大学の正門近くにあり、岩元緑の
作品に多大なる影響を与え、建設当時京都
を拠点に置き活躍していることから、京

都通信建築の意匠にその影響を見ることが
できる。
北面階段室上部のライオンの壁面裝飾
は、住友銀行本店(1926年・長谷部鋭
吉)のライオンのガーゴイル(雨水排水口)
や大阪北浜野村ビル(1921年・竹中工
務店、鷺尾九郎)のキュービズムスタイル
のライオンに引き継がれている。
1984年、保存のため改修工事が行わ
れ、翌年再開している。

西陣の町

西陣は上京区から北区に至る地域で、17
世紀中頃(寛永年間)の「西陣組」という
町組がその由来で、高級絹織物西陣織の発
祥の地であり織物産業が集まる。

北・鞍馬口通、南・一条通、東・小川通、
西・七本松通で囲まれた地域である。
NTT西陣別館は、その南東端部に位置
する。今出川通にある西陣織物会館(現・
京都市考古資料館・本野精吾・1914年)
と共に、モダニズム建築の初期作品として
地域に残る。

周辺には安倍晴明の一条戻り橋や晴明神
社があり、近代に堀川は埋め立てられ道路
は拡幅されて、堀川通周辺に高層建築が建
ちならぶ。2009年、虎屋(内藤廣)が
一条通に現代のモダニズム建築をつくり、
約90年の変遷を見るものに提供する。

岩元の本建築は保存、再生して、IT関
係の起業家のスペース(西陣IT路地)と
なり、岩元緑の若いエネルギーが、今も伝
承され生きているのである。

南東立面 外観
垂直、水平の構成は、一葉の絵画的である



かくやく
赫奕たる近代建築

2

藤井厚二

聴竹居

1928

安達 英俊
建築家・建築史家



内部 南東展開
柱と額縁の詳細に注目
ディテールが目につかない工夫がなされている

村野藤吾(1891~1984)と同世代の建築家が関西(京都)にどのような作品を残したのか。様式建築とモダニズム建築の葛藤の中で生まれた都市に刻まれた建築作品の旅に誘う。
再生・保存を経て今尚使用されている建築を、今日の眼で検証してみよう。



内部 居室から食事室を望む
4分の1の円弧が空間を緩やかに繋ぐ



内部 客室の展開
ベンチシートと網代天井、四角錐の照明



南東から南にかけてのコーナー
角に柱や方立がなく開放的



居室より南西側の小上がりを望む
視線の同一化を計る



外部 玄関に至るアプローチ
緩やかな曲線を描いて昇る



伊東忠太作の怪獣の石像



玄関 玄関ホール
間仕切が美しい



居室と調理室を隔てる壁面に
埋め込まれた時計



読書室(子供コーナー)の南西展開
机の意匠は見事なプロポーション



玄関外観
切妻に木製の玄関扉、簡易さと優しさが伺える



平面図
 <「聴竹居」見学者向け公式リーフレットより>

建築の諸元

建築家藤井厚二（1888〜1938）は京都天王山大山崎の地に、1920年代に4回2年間隔で自邸を建築している。（第1回は敷地が神戸熊内であった。）清水の水脈があるこの地を、神戸から京都帝国大学に通う途中に見つけ、12、000坪の山林を入手する。

第2回から第3回の住宅は自ら住み、第4回住宅には居住せず、その後友人に譲り、現存する最後の住宅第5回住宅は「聴竹居」と名づけられ、88年経った今もこの地に存在する。

藤井は1913年（大正2）東京帝国大学建築学科卒業の後、竹中工務店に入社、大阪朝日新聞社（1916）、村山龍平邸・和館（1917）を設計し竣工させる。大阪朝日新聞社の建築顧問であった同郷武田五一の影響を多大に受け、武田の推挙で京都帝国大学で、1920年（大正9）より教鞭をとる。村山邸・和館竣工後、第1回藤井邸の設計に入っている。

1919年（大正8）竹中工務店を退社、1年弱の期間欧米諸国の住宅建築の視察調査に出る。1928年（昭和3）竣工の「聴竹居」には10年間居住して1938年（昭和13）死去する。

建築のプロセス

- 1 自然素材の使用、工業材料の不使用。
- 2 幾何学的な、垂直水平の直線、菱形、三角形、円弧、の組み合わせ。
- 3 連続した空間構成は、緩やかな間仕切りを用い、透けた繋がり。
- 4 南東立面の構成と、大壁、真壁と建具の併用。

5 通風口、排気口の自然エネルギーによるサーキュレーション。

6 家具、照明、調度品等、意匠、素材、詳細を建築本体と統一。

北東よりのアプローチは、雁行型平面構成が、迎えるように来訪者を玄関に導く。玄関、客室、居室、食事室、読書室、縁側は、連続した空間構成で緩やかな間仕切りを用い、透けた繋がりを魅せる。南東、縁側（サンルーム）の構成的なファサードと優雅なる緩勾配屋根の構成は1葉の絵画をみるようである。桔木を用いて軒の出を各方位で違い、雨量や太陽光の調整を施している。南西の寝室等の4部屋の構成（私的諸室）は中廊下を介して並ぶ。

床レベルの変化は、椅子式と座式の視線の同化を図る。これらの設計思想は『日本の住宅』（藤井厚二著・岩波書店・1928）、『聴竹居図案集』（藤井厚二著・岩波書店・1929）として記録されている。機械設備を極力排除し、この地の気候風土を重んじ、環境そして自然の力を最大限に活用する思潮がみられる。

芸術と科学そして技術

聴竹居の内部に入ると、何か清々しい明瞭なる空間体験をする。まるで幾何学の証明が完了した時のように。その根拠を探ってみよう。

1919年の欧米諸国の「建築に関する諸設備、住宅研究のため視察」は、この建築を完成するに大きな原動力となる。

20世紀初頭当時、建築はヨーロッパ、アメリカでは、新古典主義から近代主義への過渡期にあたる。主な芸術運動、関係する建築家、画家等を次にあげる。

- オランダ「デ・ステイル」
- モンドリアン、リートフェルト



あだち・ひでとし

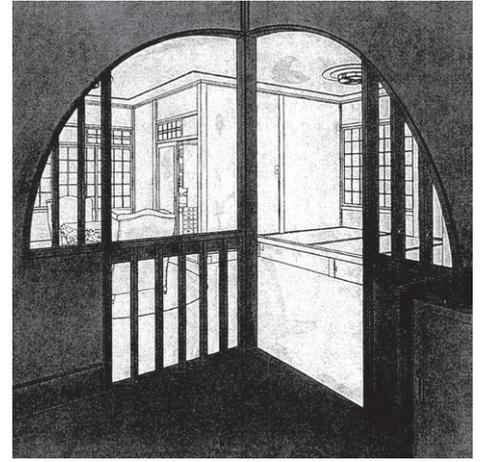
安達英俊建築研究所主宰
一級建築士、工学修士
京都工芸繊維大学大学院修了
(修士論文・近代建築の再構築に関する研究―
渡邊節の建築を通して―)
元渡邊節建築事務所所員(1974～1979)
委員/京都工芸繊維大学美術工芸資料館
「村野藤吾の設計研究会」委員(1998～)
(2005年・日本建築学会賞、業績賞受賞)
建築作品/ギャラリー
「アーティスロンク」(1999)
著書/「村野藤吾建築案内」
(TOTO出版) 2009 (共著)

参考文献

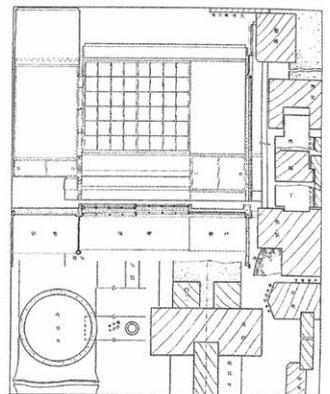
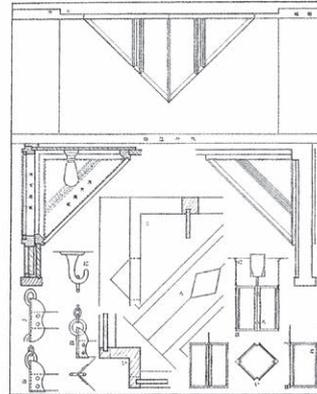
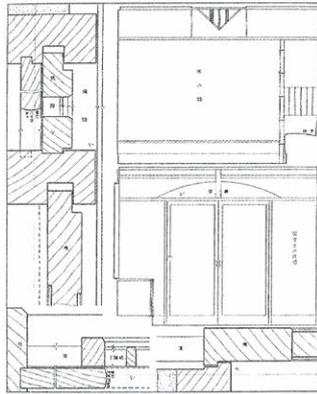
- 「聴竹居」見学者向け公式リーフレット
「武田五一・田辺淳吉・藤井厚二―
日本を意匠した近代建築家たち―」
ふくやま美術館 2004, 01
「日本の住宅」藤井厚二著/岩波書店 1932
「環境と共生する住宅「聴竹居」実測図集」・
竹中工務店設計部編/彰国社 2001
「聴竹居 藤井厚二の木造モダニズムの住宅」
松隈章著/平凡社コロナブックス 2015
「風土」和辻哲郎著/岩波書店 1935
「いきの構造」九鬼周蔵著/岩波書店 1930

写真撮影/沼田俊之

謝辞:「聴竹居倶楽部」事務局の関係者の
協力を得ました。お礼申し上げます。
http://www.chochikukyo.com/



本屋・食事室から見た居室、透視図
<2004年 ふくやま美術館カタログより>



本屋・客室部材断面詳細図/展開図/照明器具詳細図
<2004年 ふくやま美術館カタログより>

イギリス「アーツアンドクラフツ運動」・
「グラスゴー・スタイル」
ウイリアム・モリス、マッキントッシュ
ドイツ「バウハウス」
W・グロピウス、パウル・クレー
オーストリア「ウィーン分離派」
オットー・ワグナー、グスタフ・クリムト
アメリカ「有機的建築」
F・L・ライト
藤井は、これらの芸術運動の成果を現地
で身をもって体得したと推察される。
それとともに、近代科学のデータを取り
分析、検証する手法も西洋科学に学び確立
していたであろう。
その成果は1926年(大正15)「我国
住宅建築ノ改善ニ関スル研究」(博士論文)
で結実する。第2回藤井邸(1920)、
第3回藤井邸(1922)、第4回藤井邸(1
924)と、気温、通風、熱、音、等のデー
タを収集して、分析、検証している。(19
23～1924) 機械設備に頼らない、環
境工学の誕生である。
季節による太陽の変化、この地に吹く風
の流れ空気の流れ、清流のある地下水、樹
木、草木の成長の過程、それらはかつての
日本建築数寄屋のものともよく似てい
る。それを近代科学の論理性と、藤井の意
匠を用い実体化する、棟梁酒徳金之助の技
術の堅実性その三位一体が西洋でも日本でも
ない普遍的で特殊解のこの建築を生む。
この手法は、後輩にあたる、村野、堀口
に影響を与える。戦中村野藤吾が河内の民
家を移築して自邸として改築を繰り返し実
証したこと、また、堀口捨己が戦中奈良大
和小泉の「慈光院」に籠り、実測をし古文
献を検証して数寄屋の神髄にせまったこと
に似ている。ともに普遍性と特殊性という
矛盾した思潮である。その根柢は、風土と
文化にあるだろう。

「進化と普遍性をみせる住宅建築」
今世紀に入り、自然エネルギーの活用、
環境共生という住宅建築が見直されてい
る。大災害の脅威は機械設備に頼る建築の
再考が求められる。藤井の目指した思潮は
約一世紀の時を隔てて未来を示唆する。次世
代の「第6回住宅」「第7回」・・・と、実
現する建築が求められている。
ポール・セザンヌが「サント・ヴィクト
ワール山」の時々刻々と変化する風景を同
一の画面に定着したように、パブロ・ピカ
ソが女性の正面顔と横顔を同画面に描いた
ように、藤井はこの建築で芸術と科学、技
術の特徴を加算してある到達点に至った。
藤井亡きあと3年後に開戦、戦中戦後と
維持管理され、近年竹中工務店設計部の後
輩たちや、近隣住民、この建築を慈しむ人
たちにより、動態保存なされている。その
行為に感銘する。
住宅建築「聴竹居」は、色彩、機械設備
を排除して木材に施された緻密なデザイ
ンで、時間的変化に耐え、削ぎ落された空
間は約90年の時を軽やかに飛び越えて、眼
前に存在する。
●註1/卒業設計は「A Memorial Public Lib-
rary」中央にドームを持つ新古典主義建築である
同時に、伊東忠太のもとで「法隆寺論」を書き上
げている。
●註2/建築設備担当・建築特別施工法
●註3/京都府建築士会に於いて、「藤井厚二賞」
が、2015年に創設され、藤井厚二の建築思潮
を受け継ぐ建築の創出に期待する。

北西立面、伸びやかな正面玄関
海鼠壁、漆喰壁、のコントラストが見事である



大和文華館

1960

かくやく
赫奕たる近代建築

3

吉田五十八

安達英俊
建築家・建築史家



孟宗竹のある中庭・外光に浮かび上がる竹の緑が清々しい

村野藤吾(1891~1984)と同世代の建築家が関西(京都)に
どのような作品を残したのか。様式建築とモダニズム建築の葛藤の中で
生まれた都市に刻まれた建築作品の旅に誘う。
再生・保存を経て今尚使用されている建築を、今日之眼で検証してみよう。



外観、南西立面、主廊下棟、そして展示棟を望む



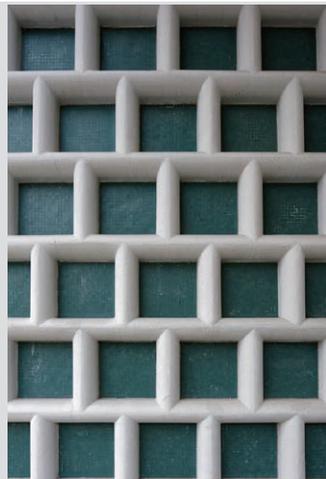
美術館へのアプローチ
なだらかなスロープは、嘗ては玉砂利であった



講堂
ステージより客席を望む、両側壁面は組木文様の意匠である



休憩スペースより南東外部を見る
蛙股池と遠景を眺める



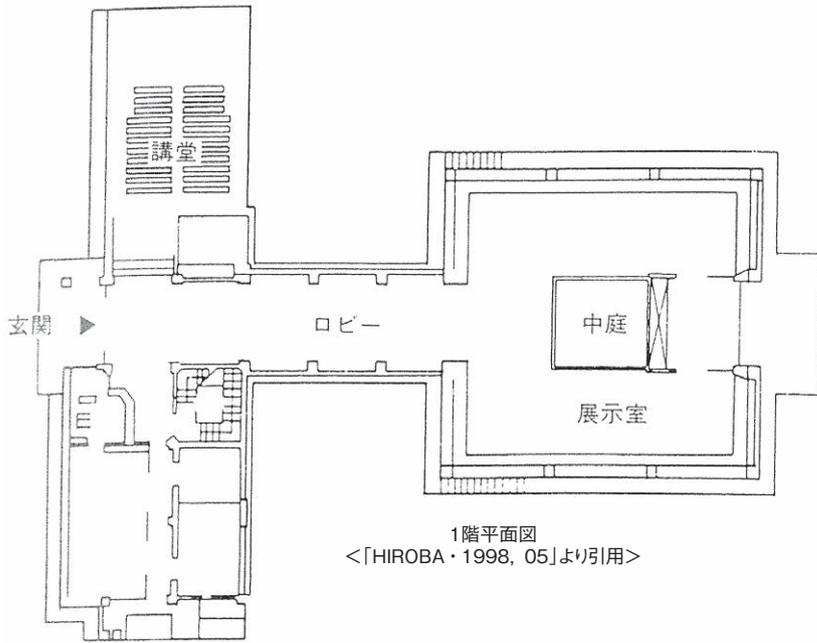
海鼠壁の詳細
エメラルドグリーンタイルと漆喰の白が美しい



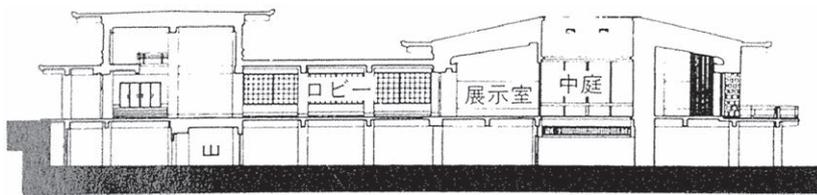
事務棟と主廊下棟を望む
石の乱貼りの上部には海鼠壁



蛙股池越しに、樹木に覆われた展示棟を見る



1階平面図
 <「HIROBA・1998, 05」より引用>



断面図
 <「HIROBA・1998, 05」より引用>



配置図(文華苑、大和文華館、蛙股池)
 <「大和文華館」のホームページより>

建築の諸元

太平洋戦争終戦の翌年1946年(昭和21)に財団法人大和文華館が発足して、この美術館計画は始まる。10数年の準備期間を経て、美術作品収集と建築計画が醸造された。

1910年(明治43)大阪電気軌道(近畿日本鉄道の前身)が創立され、1960年、近畿日本鉄道は50周年記念事業として第5代目社長・種田虎雄(1883~1948)のもとに、学園前南東側の蛙股池周辺の敷地に美術館を計画する。竣工時は、第7代目社長・佐伯勇である。京都、奈良、伊勢と日本文化圏を沿線に配する近鉄は、日本美術に特化した美術館の建設を意図する。

種田は日本美術に造詣が深い美術史家・矢代幸雄(1890~1975)に、美術作品の収集と器となる美術館の設計者の選定を依頼している。矢代は吉田五十八(1894~1974)に、その設計を依頼する。その後2010年(平成22)開館50年を機に、耐震補強工事、内部改修、バリアフリー化が行われ今日に至る。その建築は今なお、竣工時の新鮮さを保つ。周辺の樹木は時を経て生い茂る。自然苑「文華苑」は、四季折々の草花で鑑賞者を迎える。

建築のプロセス

近鉄奈良線学園前駅より南東に少し行くと、緑地に囲まれたゲイトが見え、緩やかなアプローチを上がると、伸びやかに水平にのびた美しい建築が出現する。

桃山時代の城郭を彷彿される海鼠壁、瓦ではなくエメラルドグリーンタイル張りの海鼠壁が、白い漆喰格子に見事なるコントラストを魅せる。

軒先には白い垂木状のリップが、リズムカ

ルに並ぶ。玄関ホールの左翼には講堂、右翼には事務部門、ミュージアムショップ、階段、便所等が並ぶ。竣工当時は油圧エレベーターがなく、吉田は屋根から塔屋が現れるのを嫌い、搬入エレベーターを設置していないという逸話が残る。

庫裡を彷彿させる障子壁と主柱で構成された主廊下の先に、本美術館の最大の見せ場、孟宗竹の林立する中庭があり、反時計回りに展示作品を鑑賞する。

鑑賞者には、進行方向の右手に美術作品を鑑賞しながら、中庭より自然光が降り注ぐ。外光をコントロールするために熱線反射フィルムが貼られ、作品鑑賞の妨げにならない工夫が施されている。

建築家・吉田五十八と美術史家・矢代幸雄

吉田五十八は1925年(大正14)欧州旅行で、学生時代から心惹かれていたドイツ表現主義、オランダモダニズム建築を見るため、兄の援助を受けヨーロッパ、アメリカを廻っている。この調査旅行で吉田は、むしろヨーロッパ各地に残るルネッサンス建築やゴシック建築といった古典建築の方に強い感銘を受けた。これがその後、吉田の建築観を大きく変えることになる。

吉田はヨーロッパの古典建築について、その伝統や民族性が前提にあるからこそでき得たものであり、日本人である自らには到底太刀打ちできないと考えた。日本人である自分しか作り得ない建築とは何か、当時は過去の建築様式でしかなかった数寄屋造の近代化に着目した。日本の伝統的建築について研究を始める。1930年代中程から吉田独自に近代化した数寄屋造の住宅を発表し始め、戦後には、美術館、会館、寺院等、近代数寄屋建築を展開する。



あだち・ひでとし

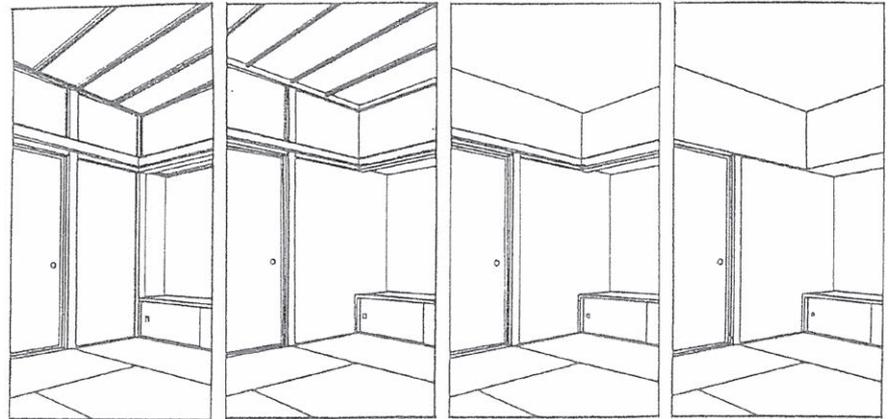
安達英俊建築研究所主宰
一級建築士、工学修士
京都工芸繊維大学大学院修了
(修士論文・近代建築の再構築に関する研究
―渡邊節の建築を通して―)
元渡邊節建築事務所所員(1974～1979)
委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館
「村野藤吾の設計研究会」委員(1998～)
(2005年・日本建築学会賞、業績賞受賞)
建築作品／ギャラリー
「アーティスロンク」(1999)
著書／「村野藤吾建築案内」
(TOTO出版) 2009 (共著)

- 参考文献
 - ・『あの建築は・・・』大和文華館―今なお新鮮』
文・構成：古今和家衆
(『HIROBA』1998.05月号・近畿建築士会協議会発行)
 - ・『近代数寄屋住宅と明朗性』吉田五十八
(『建築と社会』1935.10月号・日本建築協会)
 - ・『日本の近代建築(下)』
(藤森照信著・岩波新書309・1993)
 - ・『風土』(和辻哲郎著・岩波書店・1935)

●写真撮影／沼田俊之

謝辞：「近鉄グループホールディングス株式会社」・
「大和文華館」の関係者の協力を得ました。お礼申し上げます。

告知：大和文華館・展覧会「花の美術―季節の彩り―」
(2017・02・24(金)～2017・04・09(日))
詳細はホームページを参照してください。
<http://www.kintetsu-g-hd.co.jp/culture/yamato/>



新興数寄屋のプロセス
＜『近代数寄屋住宅と明朗性』より＞

矢代幸雄初代館長(在任期間1960～1970)の作品選定は現在、大和文華館のコレクション、国宝4件、重要文化財31件を含む約2000件におよぶ。矢代は当初、初期ルネッサンスを研究し西洋美術に造詣が深く「松方幸次郎コレクション」(西洋美術館の常設コレクションになる。)に代表される。戦後、東洋美術、日本美術の再評価の研究をおこなう。

近代和風建築

吉田は1935年(昭和10)、「建築と社会」に論文『近代数寄屋住宅と明朗性』を発表し、近代和風建築の近代化を図り、鉄筋コンクリート造、鉄骨造にも展開していく。吉田の手法の主なものとして、

1. 大壁造の採用、長押、廻り縁の省略
2. 吊束と欄間の省略、竿縁の省略
3. 荒組障子と横棧の障子の採用
4. 座式と椅子式生活のレベル差による融合
5. リシン吹付け仕上げ
6. アルミパイプの地下窓等の工業生産材料の採用

などが挙げられる。

「あつまりり仕上げ、視線の動きを平明になめらかにする。和風の様式をバウハウスの水で洗おうというのである。(中略)たしかに、数寄屋が本来持っている面の分割の美しさ、木、土、紙、草などの素材の味わいが、部材の多さにわずらわされることなく素直に表れている。」
桃山時代から江戸時代に展開された「数寄屋造り」を、吉田五十八は見事に「現代へ」と移送するのである。

軸線と中庭

和辻哲郎は名著『風土』で、竹が熱帯気

候の地に育ち雪を被ることはない、しかし日本の竹は、例外的に雪を被ることで、あのしなやかさが生まれ、そのことが日本人の特性「しなやかさ」に大いなる影響を与えていると。

一方で「西洋ゴシック建築」は、縦中心軸を進むと横軸と交差する。この部分が垂直方向に上昇空間を生み出し、神との関係を空間的に象徴する。開口部を最大限にとるために、側廊には飛梁(フライングバットレス)が発明された。

本建築では、中庭が交差点にあたり、ピロティのある地面より伸びた孟宗竹は天空へと向かう。

計画された自然は、なお奥に絵画風(ピクチャーレスク)の蛙股池と遠方の時々刻々と変化する風景を映し出す。まさしく自然を崇拜した空間演出が読み取れる。

本建築竣工時より20年ほどのちに、同世代の建築家、白井晟一(1905～1983)、村野藤吾(1891～1984)は、「松濤美術館」(1980)、「谷村美術館」(1983)を建築する。

前者は、西洋城郭のように外部を閉ざし、中庭に当たる吹抜けに面した開口部より採光し「ブリッジ」を配した。後者は、木造の廻廊をすすむと彫刻的造形数個の塊が現れる。その間より自然採光し彫刻作品を包み込む。

建築は、現地に身を置き「風の流れ、光の移ろい」を全身全霊で感じとるものである。春の到来を機に、「大和文華館」に出掛けて、ゆつくりと57年の時の風と光を感じてみては如何でしょうか。

- 註1／国宝4点
- 寝覚物語絵巻
- 婦女遊楽図屏風(松浦屏風)
- 一字連台法華経(普賢菩薩勧進図)
- 雪中帰牧図
- 註2／日本の近代建築(下)2022Pより引用

南側正面立面
中央部に「無原罪の聖母マリア」の大理石像



かくやく
赫奕たる近代建築
4

長谷部 鋭吉

大阪カテドラル聖マリア大聖堂

1963

安達 英俊
建築家・建築史家



正面大壁画、「栄光の聖母マリア」(堂本印象作)
左右壁画、「ルソン行途上の高山右近」と「最後の日のガラシャ夫人」(堂本印象作)をのぞむ

村野藤吾(1891~1984)と同世代の建築家が関西(京都)にどのような作品を残したのか。様式建築とモダニズム建築の葛藤の中で生まれた都市に刻まれた建築作品の旅に誘う。
再生・保存を経て今尚使用されている建築を、今日的眼で検証してみよう。



外観、南西立面
道路側より建築のコーナーを眺める



内観、西側展開
華麗なるステンドグラスが並ぶ



外観、東立面
縦長の四連の窓が、リズムカルである



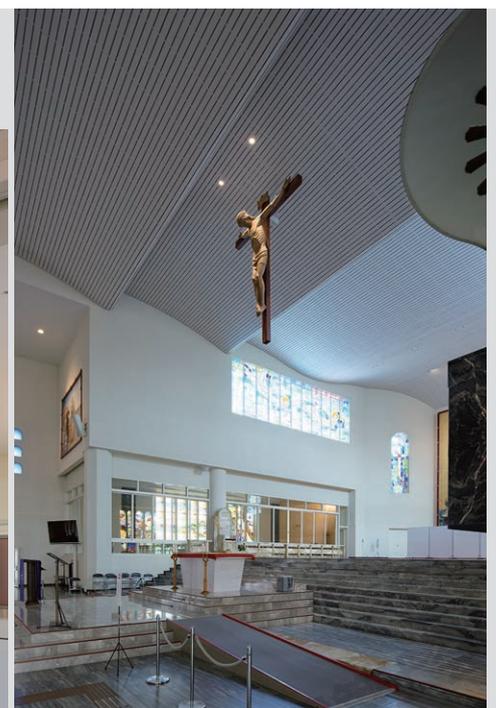
祭壇より2階パイプオルガンをのぞむ



ステンドグラス(羽瀨紅州作)
その間に「十字架の道行」(ルンガルチェ作)



説教台をのぞむ



天井より吊るされたキリスト像
(ルンガルチェ作)



写真1・「大阪司教座教会・聖マリア大聖堂」
竣工時の教会周辺、北側に大阪城天守閣を望む
<「1963・竣工フリード」より>



写真2・竣工時の内部
<「大阪教区の百年・再宣教百年祭記念」より>



図1・正面「無原罪の聖母像」のスケッチ

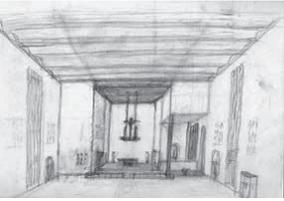


図2・内部祭壇をのぞむスケッチ

<「インターネット長谷部鋭吉の業績」より>

建築の諸元

1876年(明治9)大阪の文明開化発祥の地川口において、川口基督教会は活動をはじめた。1879年(明治12)聖堂がアメリカ人ウィルソンによってつくられた。入口は桃のように少しとがってふくらむアーチのゴシック・リバイバルのデザインである。

川口教会が外国人のための教会であり、日本人のための教会が必要となり、1878年(明治11)大阪内淡路町に、プレシ神父により教会が開設されました。ここから玉造と北野の両教会が開発されました。1894年(明治27)創立された大阪玉造教会「聖アグネス聖堂」は、マリー神父が初代主任司祭となって誕生しました。

1945年3月、6月、太平洋戦争の大阪大空襲で、その教会は焼失しました。その後、仮聖堂を経てザビエル来日400年記念の年に建設された聖フランシスコ・ザビエル聖堂に引き継がれ、現在の司教座聖堂「大阪カテドラル聖マリア大聖堂」は、1963年(昭和38)3月に落成しました。その後1995年、阪神淡路大震災で塔は被災し解体されました。

大聖堂のたつ大阪玉造は、細川大名家の屋敷跡であったことから、大聖堂前広場には細川ガラシャとキリシタン大名・高山右近の石像があり、細川ガラシャは明智光秀の三女で、細川忠興に嫁いでキリスト教の洗礼を受けました。一方、高山右近は高樅の領主で、禁止されていたキリストへの信仰を貫きマニラに追放されました。敷地は細川家屋敷跡の周辺でもあり、明治期にこの土地を購入した宣教師たちは、そのことは知らず、後に神に導かれるように、大聖堂の西北には細川越中守の屋敷跡と伝えられている「越中井」が残されており、細川

ガラシャ夫人を記念して辞世の句碑が建っており。との記述があります。(「大阪カテドラル物語」)
1958年頃、日建設計工務顧問の長谷部鋭吉(1885~1960)に設計が依頼されました。敬虔なクリスチャンである長谷部は豊富な見識で、多大なるスケッチ(図1・図2)、設計図を描き、設計を終了しましたが、その完成を観ずに1960年亡くなりました。

建築のプロセス

長谷部鋭吉は、1909年、東京帝国大学建築学科を優秀な成績で卒業し、住友本店臨時建築部に入社しました。銀行、事務所、住宅、教会建築等の作品を遺し、今日の日建設計を築いた内の一人であります。敬虔なクリスチャンであった長谷部は、遺作として、この作品を遺しました。

大阪、玉造の私立学校敷地に隣接して、その建築は現れる。南広場からアプローチすると、正面に桃のように少し膨れたアーチをもつ、水色の優雅で鮮やかなタイルを背景に「無原罪の聖母像」(イタリア彫刻家、アレギーニ作)が来訪者を迎える。四角いマッシュブなる建築は、ロマネスク建築の如く適度な開口部をもつ。(写真1)
玄関ホールから大聖堂内部に踏み込むと、正面に「栄光の聖母マリア」があり、天井に配されたキリスト像が、外陣と内陣を分けている。(写真2)

■建築概要、仕上げ材料、堂内装飾等を左記に記載します。

設計

長谷部鋭吉
(日建設計工務株式会社顧問)

構造 工・聖和建設株式会社
造・鉄骨鉄筋コンクリート造2階建

建築面積・2450㎡
延床面積・3696㎡

軒高・20m

塔高・67m

外部仕上・屋根、青銅板葺

外壁、淡クリムムタイル張

正面中央部、水色泰山タイル張

内部仕上・外陣/床、白雲色大理石

腰、ヴェローナ赤大理石

上部、セラスキン金目地

天井、吸音板張

内陣/床、ヴェローナ赤大理石

階段、白雲色大理石

壁、ボルトーネ大理石

大聖堂前広場の両端にある「高山右近」と「細川ガラシャ夫人」の石像は、カトリック信徒の彫刻家・安部政義氏作。

堂内装飾・

・正面大壁画、「栄光の聖母マリア」(堂本印象作)

・左右壁画、「ルソン行途上の高山右近」と「最後の日のガラシャ夫人」(堂本印象作)

・ステンドグラス、イエス・キリストの生誕と洗礼、聖母マリアの生涯、小聖堂には日本人に福音を伝える聖フランシスコ・ザビエル

(ベニス工房、羽瀨紅州作)

・聖像木彫

大聖堂内陣中央にある大十字架

2階楽廊にある聖母と聖ヨハネ像

大聖堂の壁面に掲げられている十字架の道行の14場面(写真3)

小聖堂の聖アグネスと聖フランシスコ・ザビエルの像

(ルンガルチエ作/彫刻家・オーストリア)

・大聖堂のパイプオルガンは、2400本ものパイプを有する。

(オランダ、ヴェルシユエレン社製)

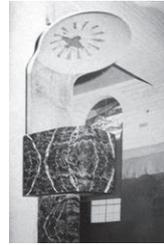


あだち・ひでとし

安達英俊建築研究所主宰
一級建築士、工学修士
京都工芸繊維大学大学院修了
(修士論文・近代建築の再構築に関する研究
―渡邊節の建築を通して―)
元渡邊節建築事務所所員(1974～1979)
委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館
「村野藤吾の設計研究会」委員(1998～)
(2005年・日本建築学会賞、業績賞受賞)
建築作品／ギャラリー
「アーティスロンク」(1999)
著書／「村野藤吾建築案内」
(TOTO出版) 2009 (共著)



写真3・十字架の道行(沼田俊之撮影)



説教台



聖フランシスコ・ザビエル



グランド・パイプ・オルガン



写真4・住友船場ビル
(安達英俊撮影)

ステンドグラス
(羽瀨紅州作・天使降誕)



竣工時の内部

<「大阪司教座教会・聖マリア大聖堂・竣工リーフレット」より>

●参考文献

- ・「大阪司教座教会・聖マリア大聖堂」(1963・竣工リーフレット)
- ・「大阪教区の百年・再宣教百年祭記念」(1968・田中道雄著・カトリック大阪司教区発行)
- ・「大阪カテドラル物語」(神林宏和著・リーフレット)
- ・「住友回想記」―「多芸の建築家」(1957・川田順著・甲鳥書林新社)
- ・「モダンシティふたたび」(1990・海野弘著・創元社発行)
- ・「モダンエッジの建築」―「建築と社会」を再読する―(2017・日本建築協会発行)
- ・「日本の近代建築(下)」(1993・藤森照信著・岩波新書309・岩波書店発行)
- ・「建築と社会」1961年3月号(日本建築協会発行)
- ・「カトリック宝塚教会」(安達英俊著・「京都だより」2015年9月号・京都府建築士会発行)

●写真撮影／沼田俊之

謝辞：「大阪カテドラル聖マリア大聖堂」・「京都府立堂本印象美術館」の関係者の協力を得ました。お礼申し上げます。

現在の堂内は幾度かの改修で、腰部や内陣の赤大理石は白い塗装に変更されている。内陣と外陣の境界が曖昧となっている感は否めない。しかし空間は、ロマネスク風の荘厳なる状況を醸し出している。

「住友」という建築家集団

明治末の頃に住友の建築部長を勤めた野口孫市は、当時日本の有名な建築家で、住友須磨別邸は彼の創作中でも殊に芸術的のものとして世間に知られた。野口の系統を引いて、住友には優秀な技師が輩出した。日高胖・長谷部鋭吉・竹腰健造・笹川慎一らの如きは、一会社の槽檻の間に斃死させるのにもつたない程の駿馬であった。彼らの創作した美しい建物は、今日でも住友の内外にたくさん残っている。^(註1)

長谷部がその一員として設計した、旧住友ビルディング(住友合資会社社工作部・第1期／1926・第2期／1930)は、今日も中之島の美しい景観の一翼を担って

いる。1909年住友本店臨時建築部に入社した長谷部は1921年この設計チームの立面主査となる。

1921年度の住友総本店処務報告書には「本工事ハ大正九年四月、日高技師ヲ全設計ノ監督及校査者トシ、長谷部技師ヲ立面主査、竹腰技師ヲ平面図主査、光安技師ヲ構造主査トシテ準備ヲ始メ・・・」と担当者を決め、その才能を発揮させている。1919年(大正8)末から翌年7月まで、長谷部は欧米に建築視察に出かけている。この研鑽が本店外観意匠に大いなる影響を与えていると推察する。

本店外壁のために、黄立山石という石英粗面岩を砕き、イタリヤ産トラバーチンの碎石と混合し、鉄筋を入れたプレキャストの石材ブロックを作成した。濃淡を付けた三種類を用意してビルの外壁四面にふりわけた。特にコーナー部には、細心の配慮が施されている。遠目には、近代建築に見えるマッシュブな塊は近づくと、様式、特にロマネスク様式の様を呈して診えてくる。

1930年に長谷部が設計した大阪堺筋、南久太郎町の住友船場ビル(非現存・写真4)は、正面の三つ並列したゴシック風の細長い尖頭アーチが美しい。龍山石を貼った外壁は、大阪カテドラル聖マリア大聖堂へと系譜を診せる。

カトリック教会と建築家・長谷部鋭吉

敬虔なクリスチャンである長谷部は、ロマネスク様式を好んだ。

長谷部は、瀧澤真弓(1896～1983)との対談で、次のように語っている。

瀧澤／「どのような建築が最もお気に召されたか。」

長谷部／「イタリアのあの壁の厚い、窓の小さなマッシュブなもの、あの気分が好きだ。」^(註2)

長谷部は、1923年(大正12)に宝塚清荒神の畑を購入して、萱葺き屋根の田舎風自邸を建設、1935年には離れが増築されます。広間をもつばらアトリエとして利用していました。

長谷部を私淑した村野藤吾(1891～1984)は、1942年頃、長谷部自邸の近隣の土地を求め大和屋根の民家を移築しています。このアトリエを、1949年カトリック宝塚教会の初ミサのために開放しました。その教会の設計を依頼されましたが長谷部は病床にあり、信頼を寄せた村野藤吾に其任を委ねました。^(註3)

世界平和記念聖堂(1954年竣工・村野藤吾)の設計を、審査員である村野は、競技設計で当選案が見つからず、教会建築に優れた才能をみせる長谷部に依頼するもの、教会内部の諸処の事情で村野自身で行うこととなる。

日本神学校(1937)、芦屋カトリック教会(1953)、大阪カテドラル聖マリア大聖堂(1963)と宗教建築を遺した長谷部は、神の庇護のもとにあるだろう。これらの宗教建築は、ロマネスク様式、ゴシック様式に、ドイツ表現主義の雄々しい石材の表現を加味して日本モダニズム建築へと昇華した。

「遠目にはモダニズム、近目には様式建築」というフレーズは、眼前のこの建築にも、はつきりと刻印されて今に至る。

- 註1／「多芸の建築家」より(「住友回想記」川田順著・甲鳥書林新社・1957)
- 註2／「建築と社会」1961年3月号(日本建築協会発行)
- 註3／「京都だより」2015年9月号「カトリック宝塚教会」安達英俊著(京都府建築士会発行)

西正面立面
見事なプロポーションと簡易化された装飾、入口上部の円弧手摺が印象的



かくやく
赫奕たる近代建築

5

森田慶一

京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館

1952

安達 英俊
建築家・建築史家



旧所長室
本研究所に寄贈された書籍が並び
リズムカルに配置された照明器具

村野藤吾(1891~1984)と同世代の建築家が関西(京都)に
どのような作品を残したのか。様式建築とモダニズム建築の葛藤の中で
生まれた都市に刻まれた建築作品の旅に誘う。
再生・保存を経て今尚使用されている建築を、今日の眼で検証してみよう。

(一社)京都府建築



整然と並ぶ書籍、規律のあるインテリア



正面玄関のディテール
庇上部の手摺が全体を引き締める



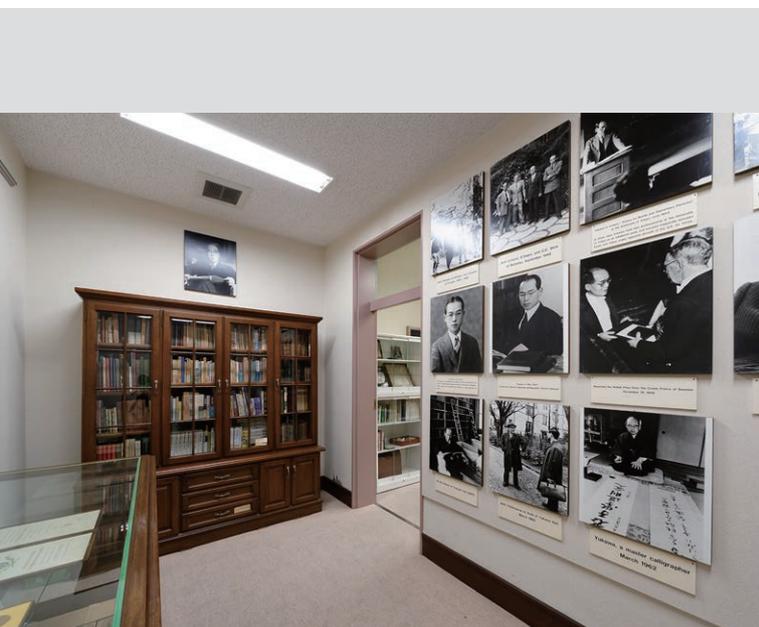
内部階段
リズムカルに構成された手摺



玄関ホール
正面にモニュメントがある



西、南立面を望む
柱、梁のプロポーションに注目



パネル展示のある旧所長室前室



南側より見る西立面
庇と円弧の手摺のディテールが美しい



裏玄関のある南立面
壁面に僅かなズレをみせる

建築の諸元

1934年(昭和9)湯川秀樹(1907~1981)は中間子理論構想を発表し、翌年「素粒子の相互作用について」により「中間子」(現在の π 中間子)の存在を予言する。

1947年セシル・パウエルらが実際に π 中間子を発見することで、1949年(昭和24)京都大学、湯川秀樹はノーベル物理学賞を受賞する。日本人として初の受賞であり、敗戦で自信を失っていた日本国民に多大なる希望を与えた。

これを記念して京都大学では湯川記念館の建設が計画された。設計は京都大学建築学科教授、森田慶一(1895~1983)に依頼される。

学内では、戦前には「京都帝国大学楽友会館」、「農学部表門及び守衛所」(1924年)、戦後「医学部附属病院」等を設計している。

分派建築会は、1920年(大正9)7月に東京帝国大学建築学科を卒業した15名中6名が卒業に当り結成したグループで、後藤慶二、岩元祿(註1)に兄事し、卒業設計展覧会を日本橋・白木屋で開催し「分派建築会・宣言と作品」を刊行する。

森田は西洋建築史や建築論の研究者であり、特にウィトルウィウス(前1世紀、ローマの建築家)の研究が専門である。戦後の森田は、柱、梁という構造材を表現した現代建築に、西洋古典建築の比例(プロポーション)を熟考した、装飾をきわめて簡略化した建築を実作している。

メンバー6名は、意匠班の堀口捨己、石本喜久治、山田守、瀧澤真弓の4名と、構造班の森田慶一、矢田茂の2名である。東大では構造の佐野利器が中心となり、耐震構造の工学面が重要視され、力学的合理性をもって歴史的な様式美を二次的なものと考え方が起こっていた。意匠性、芸術性はないがしろになっていた。特に佐野の指導を受けた野田俊彦は、『建築非芸術論』(1915)を掲げて理論的に構造主流を論ずる。これに対して、ウイーン・ゼツシオン(分派派)や表現主義の影響をうけた意匠系の堀口らが、意匠性にも才能のある森田を誘うのである。

建築のプロセス

今出川通から北に向かつて並木道を進み京都大学農学部表門を抜けて約500mいくと、「湯川記念館」に出逢うのである。鉄筋コンクリート造3階、地下1階建てである。

その時の宣言は、後の日本近代建築運動に多大なる影響を与える。

西側を正面にして、厳格なる古典様式を意識したファサードが現れる。中央玄関を軸にほぼ対称形のファサードで、コーニスにあたるシンプルな庇が、スカイラインを抑え全体を引き締める。三角形を連続したクロストラが僅かな様式意匠である。円弧のあるバルコニーはこのファサードの中心とした役割を果たしている。柱、梁に囲まれた面は、窓開口部以外は明確にグリッド割が施されている。知的で落ち着いたファ

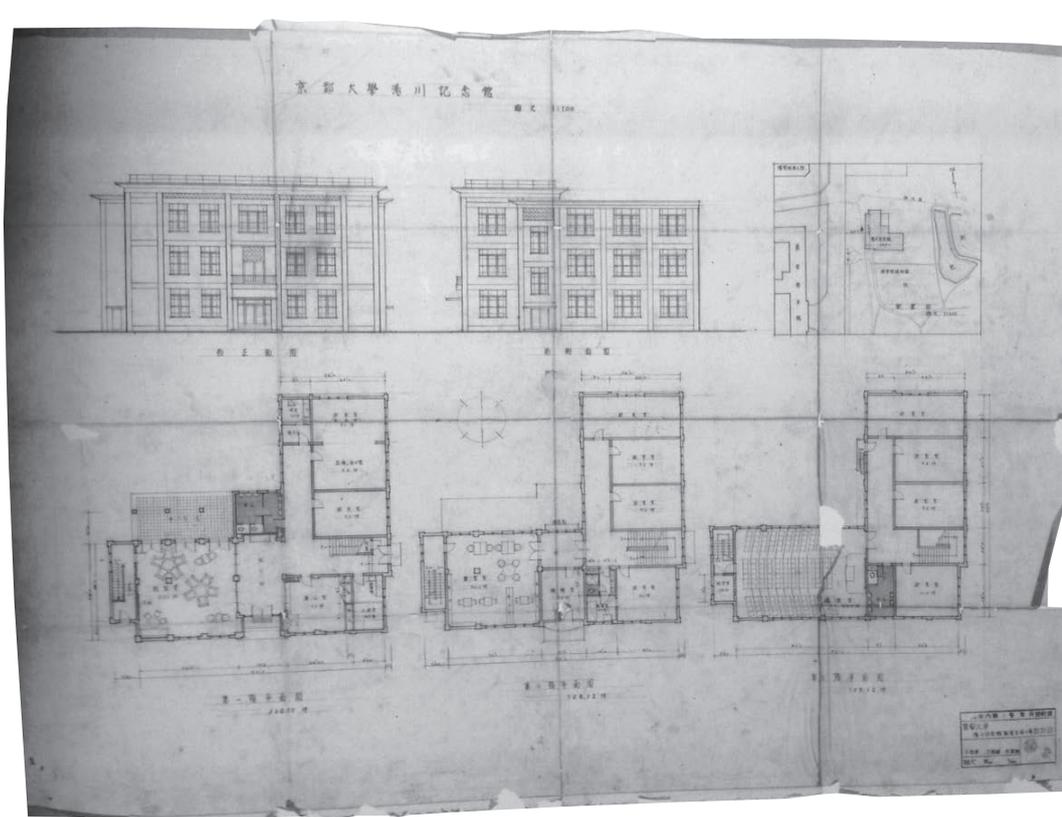
我々は起つ。
過去建築圏より分離し、総ての建築を

宣言

その時の宣言は、後の日本近代建築運動に多大なる影響を与える。

我々は起つ。

過去建築圏より分離し、総ての建築を



配置図・平面図・立面図
〈京都大学施設部所蔵より〉



あだち・ひでとし

安達英俊建築研究所主宰
一級建築士、工学修士
京都工芸繊維大学大学院修了
(修士論文・近代建築の再構築に関する研究
―渡邊節の建築を通して―)
元渡邊節建築事務所所員(1974～1979)
委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館
「村野藤吾の設計研究会」委員(1998～)
(2005年・日本建築学会賞、業績賞受賞)
建築作品／ギャラリー
「アーティスロング」(1999)
著書／「村野藤吾建築案内」
(TOTO出版) 2009 (共著)

●参考文献

- ・「京都大学基礎物理学研究所、要覧2014・2015」リーフレット
- ・「ウイトルーウィウス建築書」・森田慶一訳註 東海大学出版会・1979
- ・「建築論」・森田慶一著・東海大学出版会・1978
- ・「もうひとつの京都
―モダニズム建築から見えてくるもの―」展カタログ
京都工芸繊維大学美術工芸資料館、建築アーカイブ研究会発行・2011
- ・「分離派建築会宣言と作品」・岩波書店・1920
- ・「分離派建築会の作品、第二巻」・岩波書店・1921
- ・「分離派建築会の作品、第三巻」・岩波書店・1922
- ・「日本の近代建築(下)」・藤森照信著・岩波新書309・岩波書店・1993

●写真撮影／沼田俊之

謝辞：「京都大学基礎物理学研究所」、「京都大学施設部」、「京都工芸繊維大学美術工芸資料館」各関係者のご協力を受けました。お礼を申し上げます。



大阪府立中之島図書館別館 1956年
(安達英俊撮影)



ウイトルーウィウス建築書／
森田慶一 訳註
(安達英俊撮影)



建築論／森田慶一 著
(安達英俊撮影)

して真に意義あらしめる新建築圏を創造せんがために。

我々は起つ。

過去建築圏内に眠つて居る総てのものを救はんがために。

我々は起つ。

我々の此理想の実現のためには我々の総てのものを悦びの中に献げ、倒るるまで、死にまでを期して。

我々一同、右を世界に向つて宣言する。

(註2)

その2年後、内務省に就職した森田は、「構造に就いて」(註3)(1924)では、「構^た立^たて」という概念で、構造を超えて、を追求する。その一部を記述する。

私の構造は合理性とはなんの関わりもないものです。私たちが建築のなかに没入してながめる時、構造が私たちの心に呼びかける強さ、深さは構造されたものの功利性に基づくのではなく、構造みずからの内に潜む純粋なものに属するのです。

同1922年(大正11)内務省を辞して、武田五一に招かれ設立まもない京都大学建築学科で教鞭をとることとなる。

「建築論」

「ウイトルーウィウス建築書」というテキスト

森田は、その著書「建築論」(註4)で次のように述べている。

建築論の対象である建築は、もつとも根元的な人間作品であり、しかももつとも複雑な完全な人間作品である。というのは、建築の目指すものは、人間の生存・生活のすべての面に係わり、人間そのものに密着していて途方もなく複雑なものである。

だから、「建築する」という造物行為は多面的な目的に向かつてなされ、結局、建築という一つの作品を生むのである。この終局目的に達するための多くの目的系列を整理し、建築を全一的に把握しようとする知的欲求が生ずるのは当然である。建築論はこの欲求に応じようとするものである。

建築の本質に迫る研究は、実作を制作する時に必要となる。過去の建築物を感情的ではなく知識による創作を施すため、現地で体得する。計画や構造を決めるとき、素材の選択、人体の寸法との関係性、を見極めるために。

「湯川記念館」という建築の意味

「構造」を学生時代に学んだ森田は、1922年京都大学建築学科助教となり、

ウイトルーウィウスが著した『建築書』10巻の研究に着手する。

当時京都大学文学部には、哲学者・西田幾多郎、哲学者・朝永三十郎、美学者・深田康算らが在籍していた。

森田は、特に深田のアリストテレスの詩学に影響を受けている。1933年より36年にかけて、古典建築研究のためフランス、ギリシヤに在留している。この滞在中にみた、オーギュスト・ペレの建築作品に感銘をうけている。

「湯川記念館」は、ペレの「ヌーバール・ベイ邸」との類似が指摘されるが、詳細の比例は日本建築に翻訳されていると考ええる。村野藤吾の「南大阪教会」(1928)が、ペレの「ル・ランシーの教会堂」の影響があるように。

森田建築は戦前の表現主義から、戦中戦後の建築論、西洋古典建築研究に起因するモダン建築に変化を魅せる。

この建築に内在する「用・美・強」の概念は、実作を眼前にして感動を禁じ得ない。それは、内部の天井や梁型の古典的なプロポーションにも現れ隔々まで至る。素材が禁欲的であるのもその一因であろう。多くの建築が、饒舌である今日、一度立ち止まり65年の月日を経たこの建築を、現在の眼をもって再確認する作業が、必要ではないだろうかと考えている。

●註1 「京都中央電話局西陣分局」(岩元緑設計)

「京都だより」2016年7月号

●註2 「分離派建築会宣言」

岩波書店・1920

●註3 「分離派建築会の作品、第三巻」

岩波書店・1922

●註4 「建築論」・森田慶一著

東側正面立面
見事なプロポーション
北側に中層集合住宅



かくやく
赫奕たる近代建築
6

浦辺
鎮太郎

日本工芸館

1960

安達 英俊
建築家・建築史家



1階 陶器の展示室
丸柱と梁の構成に注目

村野藤吾(1891~1984)と同世代の建築家が関西(京都)に
どのような作品を残したのか。様式建築とモダニズム建築の葛藤の中で
生まれた都市に刻まれた建築作品の旅に誘う。
再生・保存を経て今尚使用されている建築を、今日的眼で検証してみよう。



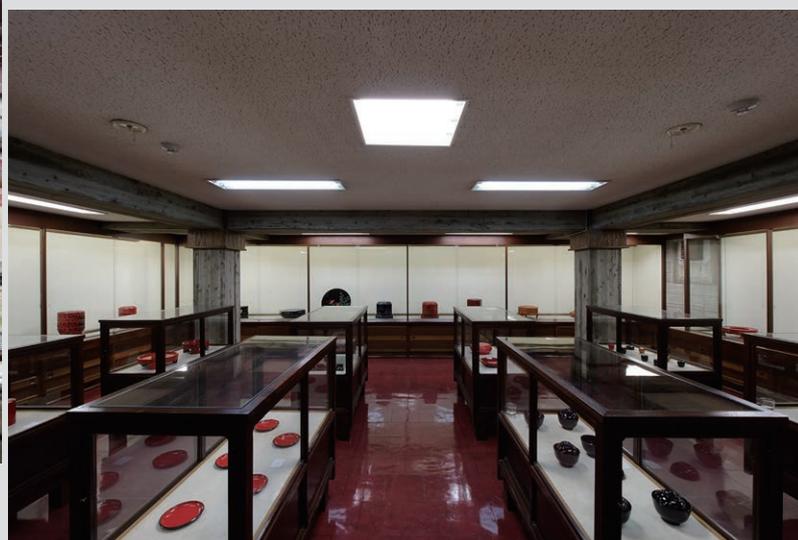
屋上から東側の塀とアプローチを見下ろす



正面玄関のディテール
玄関庇は後の増設である



西側立面
後の増築部との接点



2階 漆器の展示室
シンメトリーの構成



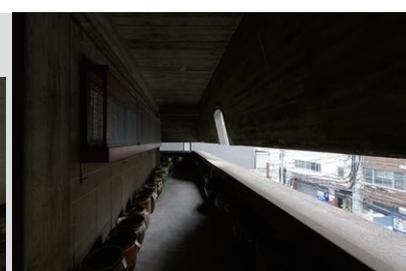
1階から2階への階段
赤色のPタイルと木製手摺



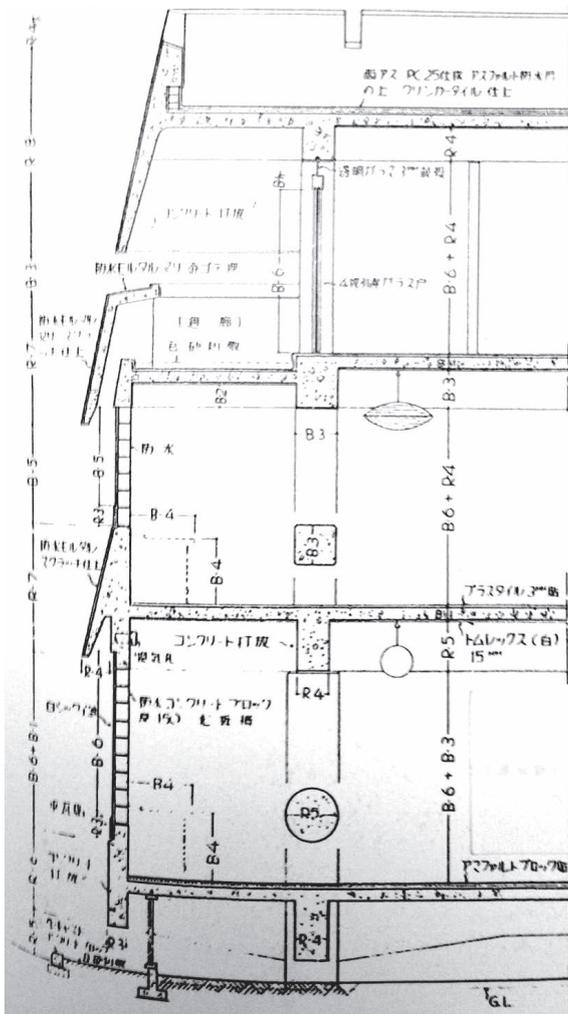
屋上東屋の展示スペース



3階 染織の展示室



3階 バルコニー部



断面図（個人蔵）

建築の諸元

1960年（昭和35）民芸運動の三宅忠一（日本民芸協団理事長、1900～1980）の依頼で大阪市浪速区に鉄筋コンクリート三階建ての建築を、浦辺鎮太郎（1909～1991）が設計する。難波より少し南側の国道26号線を一本入った、集合住宅や事務所ビルの集積する土地の一画である。

浦辺は1909年（明治42）倉敷市に生まれ、1934年（昭和9）京都帝国大学建築学科卒業、倉敷レイヨン株式会社に入社、営繕部長となる。1964年（昭和39）倉敷レイヨン株式会社を退社「倉敷建築事務所」を設立、その後1966年「浦辺建築事務所」とする。倉敷に根ざした建築家である。

1960年、浦辺はKM（Kurashiki Module）を提案し、1920mm（六尺三寸三分）を基に和風の尺貫法をル・コルビュジエの「モジュール」に応用した寸法で本建築を構成する。

建築のプロセス

本建築を構成する素材は、コンクリート、漆喰及び日本瓦であり、土から生まれた素材である。工芸運動は柳宗悦を祖にして素材そのものを見せる民芸運動であり、それと同じく建築を素材そのもので表現する。わずかに角度を持った外壁は庇、屋根、壁の要素を矛盾なく内在化している。わずかに開けられた外構部は城壁を彷彿させる。その後浦辺はこの意匠を基に、1963年倉敷国際ホテルを竣工させている。素材そのものと明確な平面計画は半世紀以上経った現在も、その建築の存在感を鑑賞者の眼

前にみせる。

正方形の平面に、1階・陶芸、2階・漆器、3階・染織、南北にバルコニーを配する、と明快な分類で展示空間を形成している。1975年西側に増築されるが、これは浦辺の設計ではない。

民芸運動

三宅忠一は1935年頃、柳宗悦「工芸の道」を読み工芸運動に参加、1950年日本工芸館を大阪北部で設立、1960年「日本工芸館」を浪速区に建設したのである。

絵画、工芸に造詣の深い大原総一郎（倉敷レイヨン株式会社社長、1909～1968）の紹介で、三宅忠一と出会い、本設計に至ると仄聞する。1960年の本建築は営繕時代の作品である。

インターナショナル様式とブルータリズム

戦前1930年代の京都帝国大学建築学科は、武田五一教授、森田慶一助教授（「京都だより」2017・07参照）の布陣で、インターナショナル様式に席巻されていた。また、建築界は1910年（明治43）以降「我国将来の建築様式は如何にすべきや」という問題を抱えていた。そのような状況下、浦辺はオランダの建築家ウィレム・M・デュドック（1884～1974）に憧れヒルヴェルムスの市庁舎を研究し、また、フランク・ロイド・ライトに傾倒し、遠藤新に師事する。

同窓に「食寝分離」を提唱した西山卯三（1911～1994）がいる。

戦後のブルータリズムは、1950年代



あだち・ひでとし

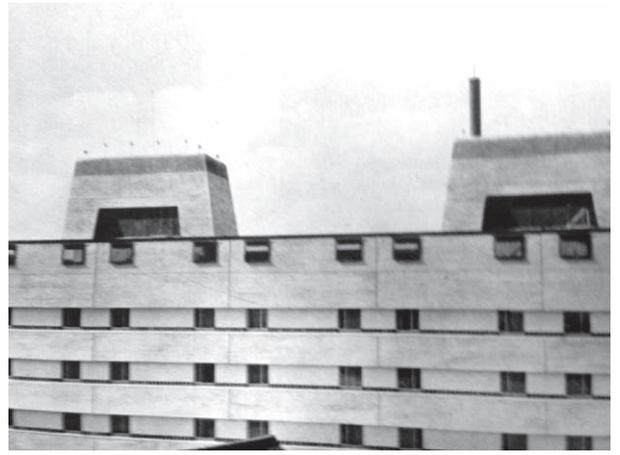
安達英俊建築研究所主宰
 一級建築士、工学修士
 京都工芸繊維大学大学院修了
 (修士論文・近代建築の再構築に関する研究
 一渡邊節の建築を通して)
 元渡邊節建築事務所所員(1974～1979)
 委員/京都工芸繊維大学美術工芸資料館
 「村野藤吾の設計研究会」委員(1998～)
 (2005年・日本建築学会賞、業績賞受賞)
 建築作品/ギャラリー
 「アーティストロング」(1999)
 著書/「村野藤吾建築案内」
 (TOTO出版) 2009 (共著)

●参考文献

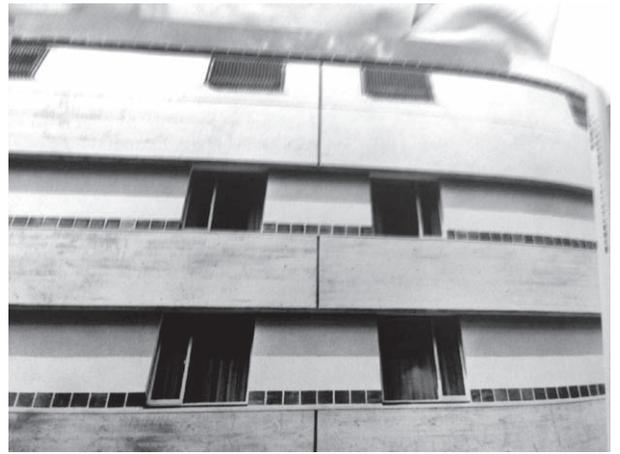
「新建築」1960年12月号・新建築社
 「日本建築家全集・12・浦辺鎮太郎、大江宏」・
 三一書房発行・1973
 「新建築」1980年4月号・新建築社
 「浦辺鎮太郎作品集」・新建築社発行・2003

●写真撮影/沼田俊之

謝辞:「日本工芸館」関係者のご協力を受けました。
 お礼を申し上げます。



倉敷国際ホテル/外観 (安達英俊撮影)



倉敷国際ホテル/外壁詳細 (安達英俊撮影)

よりヨーロッパを中心起こるコンクリートの荒々しさや、可塑性を表現して自然界の荒々しさを人工的に表象するのである。スミットソ夫妻が提唱した呼称で、代表作家としては、オランダのヒュー・マアスカント、イタリアのジュゼッペ・ペルギニ等がある。

本建築も、コンクリート打ち放しの荒々しさや、大きな壁面による構成をもち、ブルータリズムと考える。民芸的な図柄やディテールは内部に発見されるが、尚且つ異彩を放つファサードである。

日本では同じく難波に坂倉準三(1901～1969)の「高島屋配送センター」がブルータリズムできていたが、現在は解体されている。

この運動は、絵画においてはジョルジュ・ブラックに代表される野獣派(フォービズム)に匹敵する。

— 現代の意味

浦辺は村野藤吾(1891～1984)を尊敬し、自らの作品評価を彼に求めている。村野と共有する建築への姿勢を窺わせる。浦辺は、次のように述べている。

老子の言葉に「天地不仁」っていうものがありますね。この言葉は、自然はヒューマニズムではない、人間中心主義のような甘えた考え方で自然に対してはいかんということですよ。もうひとつ私の好きな歌「引き寄せて結ばば草の庵にて解くればもとの野原なりけり」っていうのがある。どっちも自然と人間、自然と建築の本質をいっている。これなんだ、私の考えのベースは。

建築がシステム化した現代社会で、今一度立ち止まり、上記のことを再確認することが必要ではないだろうか。

— 明快な区分

建築平面計画は、実に明瞭で各階に分類が施され、外部に置かれた甕や動物の置物、屋上に仕掛けられた東屋に屋外オブジェの作品群が並ぶ。

東側には、漆喰壁と瓦による扉が施されて玄関に導かれる。その庇は正面ファサードに対して違和感が否めない。竣工時はなく、その後増築時に追加されたと聞く。

1階は陶器の展示である。コンクリート打設の4本の円柱と梁に空間が支配され、1m程距離をおき外壁の展示ケースが配されている。

2階へとあがる階段はコンクリート壁面に骨太の木製手摺が特徴づける。

2階は角柱が4隅に配され、低い展示ケースが漆器に生命を吹き込む。

3階は南北にバルコニーを配し、深い庇と手摺の僅かなるスリットから光が差し込み、甕が整然と並ぶ。展示室内部は染織を中心とした作品群がある。

建築素材の扱いについて、コンクリート打設が漆喰壁と心地よいバランスであり、内部の架構のコンクリート打設に呼応している。

現地に身を置いて、57年の時を体感してみても如何だろうか。

●註1/「浦辺鎮太郎作品集」

●註2/「新建築」1980年4月号
 「状況への直言」より「自然と人間、自然と建築の本質を見つめて」

聞き手 山崎泰孝